

福岡

地域福祉活動職員の

ま な こ

社協活動前進のために

No.47 2000年8月発行 福岡県地域福祉活動職員連絡会 まなこ編集委員会

平成 12 年 3 月 12 日 (日)、約 150 名の参加者により、

第 1 回・福岡県「社協職員のつどい」

がクローバープラザにおいて開催されました！



関西社協コミュニティワーカー協会
会長 山田早苗氏



兵庫県社会福祉協議会
地域福祉部長 藤井博志氏



福岡県「社協職員のつどい」

「社協って何だろう？」 ～集まれ！将来を支える 若手（自称）職員 あの時は若かった（若気のいたり）～

第1分科会

悩める若手職員に、社協OBの久留米大学助教授、松尾誠治郎氏、同じくOGの筑穂町健康福祉総合センター所長、仲光志賀子氏、ベテラン社協マンの八女市社協、水町芳博氏の3人に話を伺いました。

社協のすばらしいところ
・一つひとつの社協は小さく、職員も少ないが、今回のつどいのように、

学習会や研修会に各市町村の職員が集まり学習できること。輝く目を持ち、「自分たちが福祉をやらなければ」という人たちに出逢い、いつも元気を頂いた。

「今、改めて社会福祉を勉強」

・私たちの地域で生活されている障害者のことを知らない人が多い。自分は、障害者の気持ちを外に出す代弁者になりたい。社協を辞めた今、改めて社会福祉を勉強している。

自信がないものを構成する要因

・若い頃は、自分に自信がなくて悩み続けた。話しをすると言葉に詰まったり、赤面したり、他人の評価が気になったり。発言しても、「なぜ、もっと上手くできなかったのか」と後悔しきり。同世代の同僚がいない、学生の頃に比べて学習する時間が少ない、職場が自分の存在を認めてくれない等も要因の一つ。しかし、自分が変わるならば？

自分を変えたキーワード

・「分かってくれる良き上司や地域の人との出逢い」「本当にやる気を出せば地域が、町が変わるといふ動機付け」「自分が一歩踏み込んだ積極的な人間に変わる努力」、これらの経験が活動のやる気へと変わった。

私たちが自身が変わるためには？

・「学習が人間を変えます」。地域で経験したこと、数字的データ等、とにかく何でも記録。社会福祉を支え



みんな、同じ重さの荷物を背負う意識として、ぜひ実行を。

・今までに、8回ほどクビだと言われたが、それでも自分は上司や周囲に恵まれていると思っている。「何も分らないくせに、黙っとかんね」と言う上司がいたら、それはその上司が悪い。心の中にある、色々な考えを外に出さないなら、それは、あなたが悪い。職種は違っても共通認識を持ち、個々の位置付けを再確認



して、みんなが同じ重さの荷物を背負うという意識を持って欲しい。

以上、3人から頂いた経験談やエールを要約しました。先輩たちにも、かつて、私たちと同じ悩みや失敗をされたと分かり、少し安心。眩しいキャリアを手本にする一方、自分たちのカラーをこれからの社協活動の中に出して行きたいと思えます。

(報告者) 久留米市社協／三原洋子

福岡県「社協職員のつどい」

**「世紀末、
当事者に期待される社協とは・・・」**

～ I L 運動から見える？社協～

第 2 分科会

第 2 分科会では、林芳恵さん（北九州自立生活推進センター）を発題者に、高石伸人さん（九州龍谷短期大学）をコメントーターに迎え、分科会を進めました。

林さんの発題

・林さんは、一二年前には、施設を出た身辺的・経済的自立が自立と考

えていました。最近では、「自分がどんな生き方をしたいかを確立すること」、「周りの人と支えあって生きていくこと」が自立ではないかと感じるようになってきました。

社協マンは、

当事者を困り込んでないか

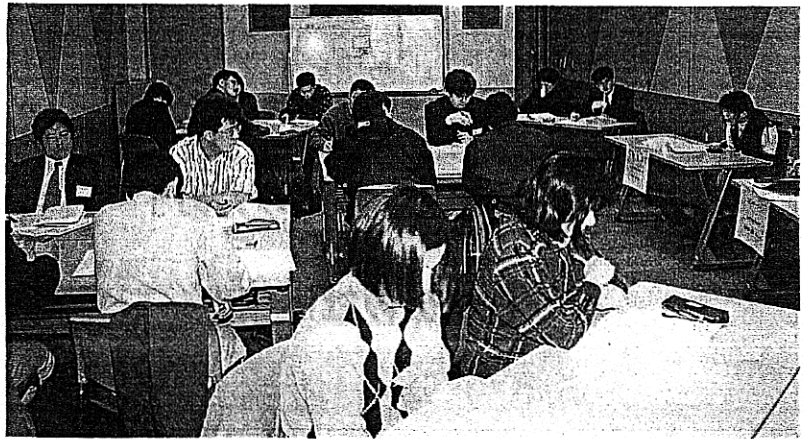
・当事者と社協職員は、本当に問題を共有しているのか。当事者は、周りの人の意見により、本人が望んでいない決定をせざるを得ない時もあります。それを安易に自己決定と取ってはいいのでしょうか。社協職員は、当事者の望む自己決定の応援や正しい選択ができるような情報提供をしてほしい。

奪われている権利

・高齢者や障害者は、自分が奪われているものも分からないほど権利を奪われています。同じ国、同じ時代に生まれて、（障害者と障害のない人は）なぜこんなに違うのか、という疑問を持ち考えることにより、奪われている「権利」が見えてきます。そのためには、多くの情報を提供してもらい、いろいろな価値観があることを知り、「あれ、これおかしいんじゃない」と考える機会を増やすことが必要ではないかと思えます。この手助けをして欲しいと考えています。

高石氏のコメント

社協は当事者を中心とした活動にシフトできるか



・私達一人ひとりの「自立観」はい加減である。自己決定には、本人が望んでいないものや不利益なものがあり、どこまで本人を中心につなごうか、どこといのかは、本当にしんどいことだけれども、社協マンはこれができるか、職員との資質が問われる。当事者は、何も言わないのではなく、何も言えないほど権利を奪われている。社協には、限界があり、その限界を見据えてどの範囲まで共有できる



かを認識し合うことが重要である。また、社協と当事者の間には、してあげる側とされる側という溝があり、この溝を埋めるためには、当事者を中心にした活動にどこまでシフトできるかが、今の社協に問われている。権利擁護事業については、誰のための権利擁護なのかを認識するべきだ。社協という組織は、古い体質の組織で、新しい運動には馴染みにくい。時間をかけてシフトしていく必要がある。

林さんから障害のない人に伝えたい

・今は、当事者の声を聞かないままにいろいろなシステムを作っている。そのため制度等に歪みがある。当事者に「聞く」という姿勢を忘れないで欲しい。

限界があることを互いに認める

・「障害がない人にはかできないことと、障害者しかできないことがある」。例えば介助は障害がない人しかできないが、できないことを現実的に伝えることは、障害者しかできない。「障害を持っている人しか分からないよね」という発想をぜひ持って欲しい。組織ごと、個人ごとで考え方が違うのは当たり前で、これを「違い」だけで終わるのか、「違い」を認識したうえでお互いに考えていくのかで社会は変わってくる。

社協不要論について

・政策は、昔は△(三角形)だったが今は、▽(逆三角形)になっている。国の出す政策には、すばらしいものもある。その政策を地方でやりきれない。やったふりのパフォーマンスを担がされているのが社協。Iセンターも設立当初は、「何かしよう」、「お金がなくてもやっという」という考えがあったが、今は、職員を雇うためにはお金がいる、お金のためには事業をしなければなら

ない、という形で事業が膨らんできて、本質を失っているように感じる。社協も同じ。それが、本質を失ってきている社協に対する「社協不要論」にもつながっているのだと思う。

高石氏から参加者に伝えたい

実現はできなくても夢は忘れずに

・社協マンは、当事者のもとに足を運んで話を聞いているか。当事者の顔色をうかがっているか。職員はあぐらをかいていないか。その結果として、当事者から社協はいらないと言われているのか。

社協という組織の衣を脱いで「私」という視点に立って考える。

「みんな違っていい」のは当たり前。分からないなら聞いてみるという立場を忘れていない。支え合うのが共同性。(これは確かにしんどい。しかし)しんどい向こうに幸せがある。たとえ実現できなくても、夢を忘れないで……。

まず、自分がかわろう

・社協は、どこに足場を置いているか。衣替えをする覚悟が必要。組織を変えるのは難しいから、まず、自分自身が変わらなないといけない。

私達は問題当事者だ

・私達は、障害者ではないが問題当事者である。だから共に取り組む義務がある。

線としてのつながりを

・今、地域社会が崩れてきている。面としての期待はできない。自分の力で線としてのつながりを造っていく。

(報告者) 芦屋町社協/安部知彦

| |
|--|
| <p>福岡県「社協職員のつどい」</p> <p>「介護保険時代の 在宅福祉のあり方」</p> <p>～20日後の社協～</p> <p>第3分科会</p> |
|--|

介護保険施行まであと二〇日というこの日に、第3分科会では、介護保険時代の在宅福祉のあり方について意見交換を行いました。

発題者の山下恭平氏は、元八女市社会福祉協議会ボランティアセンターの職員、現在は八女市社協より発展分離した会社「ケアライフコーポレーション」に、勤務しており、居宅介護支援事業者と訪問介護サービス指定事業者として、毎日ケアプランを作成しています。

自分でケアプランを作成しながら、社協だからこそやれるということが見えてきた。

安心と安全。安心は本人が決めることであり、安全は周りが判断することであると思うが、現在のプランは、安全なプランといっても過言ではない。社協の理念CD(地域福祉)を中心に、社協だからこそできることを見出し、社協ならではのということを表面に押し出し前進されることを希望する、と述べられました。

2人目の発題者、山崎和彦氏は、前原市社協に勤務されています。同社協は、介護保険事業として居宅介護支援事業者・訪問介護サービス・通所介護サービス・訪問入浴の指定事業者となり、職員も五〇名ほど勤務されていますが、事業者として、経営と雇用の問題は大切なことであると痛感しており、経営的事業と社協活動としての課題解決に向けて努力していきたいが、経営



事業を推進することにより、ニーズが埋没し、コミュニティが見えなくなるのではないかと感じている。

社協職員は、地域住民と共に仕事をしているという確認が必要であり、その人の能力に応じた自立支援、その人らしい自立した生活の支援を、社協が実施していきたい、と述べられました。

3人目の発題者、松川宏美氏は、北九州市社協に勤務されております。同社協では、常勤職員が多く、給与面でも高い方でしたから営利という面で独立採算は無理だとの判断から、介護保険事業からは撤退することとなりました。

障害者を対象とするホームヘルパー事業、障害者・高齢者のデイサービス、

生きがい対応型のデイサービス、障害者対応の移動入浴サービス等を実施していくので、約半数の四四人の職員が職を離れないでよいと思います。

今後は、社会福祉協議会で事業を作り出し、それを市委託に持ち込む工夫をしながら委託事業費につなげたい、と述べられました。

3名の意見発表後、5つのグループに分かれ、グループ討議を行い、介護保険が見切り発車するのだから、社協職員の意識を変えていくべきである。

・民間参入もあるが、社協のサービスは民間より上だ、という自信を持ち、地域に密着した、クライアントにとって安心のプランで介護サービ

スを推進する。

等の意見が集約されました。

最後に県社会福祉協議会地域福祉部の南部長からのコメントとして、高齢者の生活をトータルに捉えることが必要であり、ケアの部分とコミュニティの部分の違いはあるが、事業を通して協力し、連携を深めて欲しい、とのまとめをいただき、分科会を終了しました。

(報告者) 広川町社協／青山 忍

福岡県「社協職員のつどい」

**「地域福祉を築く
コミュニティワークとは？」
～あなたは
地域課題が見えていますか？～**

第 4 分科会

今回のテーマにあるコミュニティワークを、県内の社協職員はどのように捉えているのか、コミュニティワークとして十分にコミュニティワークを行うことができているのか、調査を行い、その結果を報告しました。具体的なものは当日資料・もしくは今後作成される報告書に詳しく掲載されることでしょう。

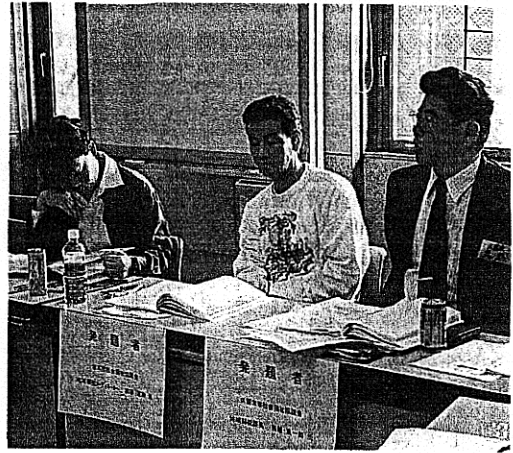
さて、第4分科会では、コミュニティワークをどのように捉えているか、久留米市社会福祉協議会の鳥越真一郎氏、甘木市社会福祉協議会の前田正剛氏を発題者に迎え、鳥越氏には、基本的な柱と概要について、また課題解決までのアプローチの方法について、久留米市社会福祉協議会の地域福祉活動計画を通しての報告を、前田氏には障害者関連の事例を通して、問題解決までのアプローチについての報告をいただきました。

参加者との意見交換では、「自分にとって何が地域福祉課題なのか？今誰の顔が一番に思い浮かぶか？」という問いに、

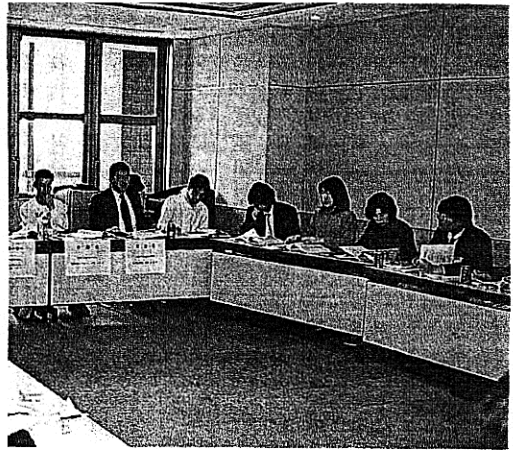
- ・住民主体組織化の関わり
 - ・在宅福祉サービスのマンパワー活用
 - ・在宅介護者の組織化の関わり
 - ・低所得者の状況把握
- といった声が聞かれました。

最後にコメントーターとして、関西社協コミュニティワーカー協会会長・大阪府社協の山田早苗氏より

- ・「社協」という特性のある団体で住民一人ひとりに関わっていきける「社協のコミュニティワーカー」として、社協内の都合は次の問題として、まずは住民の想いをどれだけ受け止め、解決に向けて実践しているかどうか、これがキーワードとなっていく。



- ・コミュニティワーカーとして、「この人のことを何とかしたいといけない」と思うことが大切である。
- ・常に問題の入り口と解決への出口をはっきりイメージし、問題解決型に持っていかなければ問題はいつまでも解決しない。
- ・住民からどれだけの信頼を得ているか。



- ・今後の課題として、課題シートをどれだけ作成して、研究を積み重ねるか、また、応用課題だけをピックアップして、今後の検討に積み重ねるのもよい。
- ・細やかな配慮がコミュニティワーカーには必要である。自分の得意技を使いながらどのように関わっていくか。

- ・社協のコミュニティワーカーは率先して何事も実施していくべきである。一つのことを実施して、それが失敗に終わったら、自分の力量、周囲への協力依頼が足りなかったと思わず、自分のせいだと思ふこと。物事が成功した時、自分のせいだと思わず、周囲の協力があつたからだと思ふこと。

以上のようにコメントをいただき、分科会は終了いたしました。

(報告者) 福岡県社協／松永玲子



福岡県「社協職員のつどい」

**「社協の未来を切り拓く
キーワード探し」**

**～キーワードは当事者・行政
・民間 委託?～**

第 5 分科会



第5分科会は、社会福祉協議会の屋台骨を支えている人たちの分科会として設定し、「岐路に立つ社会福祉協議会」をこれからどういう方向に向けて舵取りしていくかをテーマに、発題者として、苅田町社会福祉協議会事務局長の福山直樹氏、また、コメントーターとして、産業医科大学教授の松田晋哉氏、兵庫県社会福祉協議会地域福祉部長の藤井博志氏を向かえて協議しました。

まず、発題者の福山氏より、介護保険事業に際しての苅田町の取り組みとして、事業者として参入するか、否か、また、管理者（事務局長）として、行政を含めて、いかに一つひとつのハードル（課題）をクリアしていくか、苦汁の選択を迫られたことを経過とともに話しをされました。

二転三転する理事会、行政の裏付け・行政のお墨付きがなければ経営できない社協基盤の脆弱さなど、理想と現実のギャップを感じながら、最終的には、「参入しない」方針が理事会において決定されました。

このような報告を踏まえ、参加者より「完全に民間事業者にまかせていいのか?」「公的なサービス機関が必要ではないか?」「市の総合福祉計画の中で、行政と社協は、車の両輪関係だから、社協に対して支援すると位置付けられている」などの意見が出された。

- コメンテーターの松田氏より、
- ① 社協としての理念の確立
 - ② マーケティングの重要性
 - ③ 情報の核にならなければならぬ
 - ④ オンブズマン機能・評価機能
 - ⑤ 住民に支持されるシステム

以上が重要であると唱えられました。また、藤井氏より、介護保険に参入するか、否かは、地域特性とか苦汁の判断であり、撤退するにしろ、参入するにしろ、サービスの質の検証をしたのか?介護保険は、明らかに保険であって福祉ではない。一番苦しい介護の部分にどう関わるかという視点が大切である、とまとめられました。

(報告者) 大牟田市社協/内田 勉

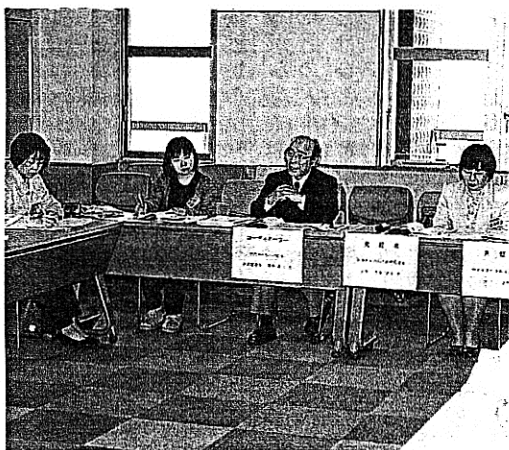
福岡県「社協職員のつどい」

「That's ネットワーク」 ～NPO・ボランティア との新たな関係づくり を求めて～

第 6 分科会

今回のテーマにある「NPO」については、一九九八年三月国会において NPO 法案の採択を契機に、日本社会の変革が見られる。直接的に社協が連動することはなかったが、社協の体質をどう変えるか、社協の働きの分野を新たに開発していくかに取り組み刺激となったようだ。社会福祉基礎構造改革により、終戦直後の救護対策であった事業法が、豊かな今の日本社会の現状に合ったものへの内容が変化されてきている。NPO と社協を関連させて市民社協の形成をいかにしていくか。

・ NPO 団体とボラ連の関係づくりはうまくいくのか。
・ 両者の意識向上に社協がサポートできるのか。
・ 2 人の発題者より
・ ボラ連に参加、加盟する団体の強化と情報交換を重点に置き、社協の手足とならない、ボラ連として自立的に考えている。
・ なぜ、社協から独立して NPO なのか。社協のマンパワーがなく、ノウハウに欠け、全てのことを障害者の立場に立って成しえる器がなかった。等々、社協に対してのシビアなご意見も：
両者の抱えている問題点、課題点は多く、社協への期待も大きい。地域のボランティアグループと NPO 団体と社協が、常に連絡をとる体制づくりが必要である。



連携をとる上でコーディネーターを育成し、ボランティアセンターのサポート役、また、NPO のサポートセンターという立場でコーディネーターを担うことになるのではないだろうか。
コーディネーターする際の手法、情報の集め方、また、発信できるシステム等はコーディネーターする機能の強化につながる。ネットは同じものでも質の違うボランティアセンターと NPO 団体との関係。将来的には NPO が地域の発信地となっていくかもしれないところで、自由発想、自由活動、そして自由さをもった社協像というのが求められていくのではないだろうか。
社協が福祉の専門職としての資質向上を求められてきていることは、今後の課題として努力すべきところである。

(報告者) 太宰府市社協/古川 妙子



社協からの望

フリートーク

岐 路

杷木町社会福祉協議会

原田 且吉

突然の原稿依頼に戸惑いを感じながら受けたものの、何を書こうかなと思いい、よい機会を与えていただいたと感謝しながら、半生を振り返り書いてみようと思います。

高校卒業と同時に、国鉄に採用されたのが昭和四〇年でした。久留米駅、夜明駅、大行司駅、筑後吉井駅、博多駅、原田駅、日田駅と転勤し、輸送業務(営業)に携わってきましたが、JRへの移行前の昭和六二年二月から再び博多へ、四月の民営化と同時に旅行

事業を興すということ、私を含め各地から十数名が集められました。ここでの四年間は厳しくも、充実した日々ではなかったかと思っています。

振り返って見れば、入社以来、余暇を利用して二〇代は青年団活動に奔走し、その中で世の中の矛盾(自我)を強く感じ、社会教育の必要性を感じ、役場に入り社会教育をやりたいと真剣に悩み、役場の試験を受けようとした。奇しくも福岡県政「百周年記念」事業の一環で、第一回「青年の船」に乗船できるようになっていましたが、最終選考日と役場の試験が同じ日になってしまいました。船に乗れるのは二五歳まで、県、役場に交渉しました。でも両者とも受けて貰わねばとの返事、体は一つ、迷いに迷いました。運悪く私ともう一人、一歳下のY君も乗れるようになっていましたが、訳あって家を出し、行方不明となってしまいました。彼が乗船していれば、今の私は無かったと思っています。これが最初の「岐路」です。お陰で無形の財産(友人)をたくさんつくることができた時期だったと思います。

2 回目の「岐路」は、誰でもあることと思いますが、伴侶を決める時も考えるのではないのでしょうか。私は二十七歳で結婚をしました。自分で言うのもおこがましいのですが、素晴らしいパートナーと出会えたと思っています。妻の進めもあり、結婚を機に「ボーイスカウト」の活動を手伝っています。

現在も続けられることに喜びを感じています。

若い頃から山(登山)や川(釣り)が大好きで、子供(男の子)達と一緒に過ごす自然の中の生活は最高です。

次は、冒頭に少し触れましたように、国鉄から民営化移行時に博多旅行センター(現在はジョイロード博多支店)にどの人事課からの内示、まさに人事とはひとごと、二度断りましたが転勤せざるを得なくなりました。毎日、睡眠時間三〜四時間の生活が四年間続きましたが、新しい事業に取り組むのだという自負。上司からは、お前たちは「選ばれて来たのだから」、また、後からみえた社員には、「お前たちは進んで来たのだから」と上手に使い分けられました。しかし忙しい中、趣味と実益を兼ね、月一回、登山のツアーを計画し、北は利尻岳から南は屋久島まで、海外の台湾(玉山)、韓国へも行くことができました。また、仕事で福岡市内のF高校を担当していました。一九八八年夏、第七〇回記念大会に福岡県代表として甲子園出場が決まりました。地方予選から県大会へ、毎回の応援、そして甲子園。その夏は、球児だけでなく、私にとっても初めての甲子園でした。試合時間に合わせ様々な応援輸送体制をとり、決勝戦まで行くことができました。その間、業者間のドロドロとした醜い争いであるとか、癒着とか、フェアでない部分をいやというほど知らされましたが、要は「人は人に

ついてくる」、「物売る前に人を売れ」と自ら肌で感じ取ることができました。「企業は人なり」と言われます。新入JRの社員として生活をしている時、第四の岐路が訪れ、社会福祉協議会にとの話でした。戸惑いを感じながら、地域のためにお役に立てるならと決断をしましたものの、妻だけが反対をしました。

出向して一〇年が過ぎ、この仕事の間口の広さと言いつ、奥行きと言いつ、業務内容の難しさを痛感しているところでは。

これからの、福祉活動(仕事)の難しさを感じているのは私だけでしょうか?今までに、様々な体験をしてまいりましたが、経験を活かし「誠心誠意」事にあたりたいと考えています。これからも未だ「岐路」が幾つか訪れるかもしれません。ポイントを正しく切り替え、残された人生を精一杯生きていきたいと思っています。



フリートーク

**「これまでの10年、
これからの10年」**

筑後市社会福祉協議会
長野 誠

早いもので、この道に入って一〇年目の春を迎えた。

時々、いや、よく思うことがある。この一〇年間、社協コミュニティワーカーとして、何をやってきたのか、何がやれたのか、自分がいることで何が変わったのか、ということ。

自分の中で仕事に対する目的意識も持たず、また努力しようともせず、与えられた仕事を黙々とこなしていくだけなら、そんなに困難なことではない。

昨年の『福祉の職場説明会』の中で社協ワーカーを志す求職者の人たちに對して、「端的に言うと、ワーカーは、保守的な人よりも、むしろ改革的な性格の人でないと務まりません」ということを話したことがあった。

これはもちろん自分なりの考えを述べたままで、誰しもが同じ考え方ではないと思うが、自分自身がワーカー生活の中で、常日頃から感じていることを率直に言わせてもらった。

意欲を削ぐような言い方をしてしまったと後で反省した面もあったが、そういう自分こそ、どう見ても保守的（受身）な性格の人間である。

自分のカラーが出せない、自己主張ができない、仕事ぶりを振り返り、こういうふうに関心分析しているコミュニティワーカーは自分だけだろうか。ところでみなさんは、三月に行われた『第1回福岡県社協職員をつどい』に参加されたことと思う。

自分は第2分科会に参加したが、討議の流れから、冒頭の中山会長の基調提案の中でも触れられた、「社協不要論」が話題に上がった。

進行役の若宮町社協の鈴木さんから「社協は必要ないって声が上がっていますよ。それでいいんですか？どう思いますか？」と考えを求められたが、言葉が何も出なかった。情けなかった。

一〇年近くも社協でメシを食ってきていながら「だから社協は必要なんだ！」ということをお説けない自分が…。

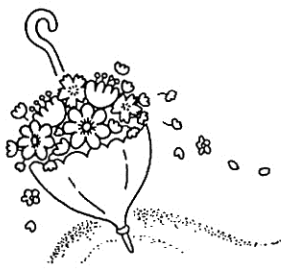
ああ、何かここまで自己批判と後ろ向きな表現ばかりを並べてきて、ひとりよがりのトークになってしまっているが、一〇年の節目を迎え、ここでも一度社協ワーカーとして自分はどうあらずしてはならないかということを考えてみると、現状維持で終わってしまおう：自分の中にあるそんな思いを同じ仲間にもわかかってほしいという思いでつらづらと綴ってみた次第である。

そんな自分のエネルギー源は、ワーカーとしての自分を頼って相談を持ち掛けて来てくれる人たちの存在。

ある先輩ワーカーの言葉を思い出す。「自分を頼ってくれた人たちと一緒に考え、福祉課題を解決した時、初めてこの仕事をやってよかった！と思える瞬間を巡り合えたんだ。」

ワーカー冥利に尽きるとは、こういうことを言うのであろう。

これからの一〇年、自分も「この仕事をやってよかったあー」と思う瞬間に巡り合えるよう、気合いを入れた。



フリートーク

振 徳

芥屋 鐘人

あなたは、資格や免許の類をいくつ持っていますか？そして、それをどれくらい活用していますか？私のように人生の峠を下りはじめるくらい生きてきた人ならば、どなたもそれなりに手に入れたものがいくつもあるでしょう。

私の場合、高校時代に仮病を使って早退し、初めて手にしたのは原付免許。国家資格第1号だったので、とても感動したことを今でも覚えています。

そして、それから半年後、毎日母に一〇〇円の昼メシ代をもらっては、学

食で三〇円の素うどんを食べ、空腹に耐えながら受験料を貯めて手に入れた自動二輪免許。育ち盛りの真只中にそんなことするもんで、頭に栄養が行き届きませんでした。それから、第一種普通自動車や大型一種、電話級と電信級のアマチュア無線技士。次は、左大腿部の脂肪腫切除手術で下肢障害になって間もなく、ジェットスキーに乗りたいたいばかりに、屈伸もできない足の痛みをこらえ、何ともないフリをして受験した4級船舶、ツーリング好きの趣味が興じ、悪乗りしてチャレンジした国内旅行業務取扱主任者資格、職場の将来を見据えてまじめな気持ちで挑戦した第一種衛生管理者などなど。

でも、これらの免許や資格をどれくらい活用しているのかというと、悲しいかな、毎日の通勤に使う車の免許くらいですネ。好きな二輪車は、一〇年前のギックリ腰以来、万年腰痛で縁遠くなったし、ツーリング先で誰かに感動を伝えるために持って走った無線機は軽くて便利なケイタイにとって変わったし、ジェットスキーが高くて買えずに、2回目の免許更新を迎えようとしている船の免許なんぞは、パーフェクトなペーパードライバーになってしまっているし、どれもみんな役立っているつもりで取ったものなのに、今じゃカピだらけ。

それほど本当にほしくて必要な免許や資格は簡単に取れないもんですよネ。ここ数年、何かと資格の時代へと移りつつある社協の中で、役立つものは今のところ何も持たないオジサンの大きなため息とグチでした。 おわり



あなたはどうですか？眠っていないですか？せっかくな努力して取ったのに、このまま腐らせてしまうのはド

第7回全国社協職員のつどい

参加報告

筑後市社会福祉協議会

中山 陽一

点……。とにかく他のどの研修会よりも、内容面や力の入れ方、形式に囚われないこと、何かを得たい者にか与えてくれない自由さなどが、とても自分にはぴったりとくるし、素晴らしいと思っている。

行ったことのない社協マンには、ぜひ、行って、自分の肌で、感じてきてほしいと切に思う。

今回の「第7回社協職員のつどい」は、住民主体で創ろう地域の福祉」社会福祉基礎構造改革の動きと地域福祉を推進する社協の役割」と題したもので、一応、各分科会のテーマを紹介しておきたい。

第1分科会

「介護保険時代でも地域の住民福祉活動の根っこは変わらない」

第2分科会

「社協職員として当事者とどう向き合うか」

第3分科会

「社協ボランティアセンターの存在意義」

第4分科会

「社協流・地域における自己実現の支援」

第5分科会

「介護保険下における在宅福祉サービス」の事業展開

第6分科会

「低所得問題に対する社協の役割とは何か」

関西コミュニティワーカー協会主催の「全国社協職員のつどい」は、行くたびに「大切な何かを必ずもたらして帰ってくる事ができる」そんな場として実感している。

何をもらってくるか？

それは、まずは、姿をまじませよう。自分のパワーの再生と充電。そしてもう一つは、自分が社協マンであることを再確認させられる点（社協マンなら社協が抱えている問題のすべてを認識して当然といったような）。次に、いろいろな研修方法のあり方。また、社協活動の明日のための材料やアイデア。そして、今日的な福祉課題への視

基礎講座

「なりたい社協ワーカーになろう」

各分科会における報告は、他の人に任せることにして、私は、今回のついでで拾った、「考えさせられるフレーズ」あるいは、「今後の社協活動のキーワード」を紹介して報告に代えたい。

○社協活動の根底にながれているのが権利擁護。

○（問題を）発信できない住民の存在……そういう人たちに社協がどうかかわって環境づくりを進めることができるか。

○動いている社会状況の中で、動きのある社協に。

○当事者の主体性、自己決定を見極め、段階を揚げていく見定めを。

○「初期相談」におけるニーズ把握が十分でないと偏った対応となってしまう。その能力が問われる。

○制度には限界があるが、相談には限界はない。まずそこからのスタート。悩み事を捨てるごみ箱として社協があってもよいのではないか。

○公的社会福祉の拡充が必要。

○C・Oを通じて住民福祉運動化を。

○住民主体形成で介護保険の検証を。

○社協や地域の組織を変える「人」になろう。

○存在感のある社協、リーダーシップのある社協に。

○中から変える、変えられる力が社協にはあるのか！

○補助金を受けることが「依存的」ではない。「自己決定」、「自己責任」がとれるかが問題ではないか。

○暮らし続けられるまちづくりは、介護保険の枠組みにとどまるものではない。

○社協活動は、「仕掛け」が大事だ。

○社会的な社協の役割を求めて、「社協フォーラム」の開催を。

○社協職員は「学習」が不足している。他の職種（保健婦など）は、手弁当でいろんな学習会に参加している。その点社協職員は甘えているのではないか（学者弁）。そのことが住民を鶺鴒の「鶺鴒」にしてしまう原因をつくってしまうことになるとすれば……



第7回全国社協職員のつどい

レポート

小郡市社会福祉協議会

能塚 治一郎

第1分科会「介護保険時代でも地域の住民福祉活動の根っこは変わらない」住民の暮らしにいきづく福祉のまちづくり研究では、4人の発題者の意見を聞き、グループディスカッションを行った。参加者は三〇数名と想像したより少なく、4つの班に分かれ、私の班には基調提案をされた京都府宇治市社協の岡野実行委員長や分科会発題者、分科会司会者、分科会報告者、パネリストスキャッションのパネラーがいて、残る若いものでいつものごとく司会・書記・発表者を決めなくてはならず、必然とどれかにならなくてはならない状況で一番案と思われた司会を買って出た。とは言え、熱い議論をまと

めるには苦勞し、実際にはまとめる話でもなく、何もしていない状態でした。さて、寝屋川市社協の高橋さんの発題「社協における介護保険事業（居宅介護支援事業）とは？」

小地域福祉活動・ボランティア活動をインフォーマルの社会資源化としサービスとしてどう組み入れるか。安易なサービス供給の恐れやボランティア・地域住民はどう思うのか、社協の技量が問われる。社協の介護支援専門員のあるべき姿として、インフォーマルサービスといわれるボランティアや小地域福祉などの情報の共有化やネットワークの重要性を説き、「寝屋川市ケアマネージャーの会」の発足について説明された。

わが班ではボランティアや住民活動をインフォーマルなサービスに組み入れられることの是非について意見があったし、私も納得できず消化不良のままだった。

次に、京都府東山区新道学区社協折田さんの発題「私が社会福祉活動にかかわった『きっかけ』と、その喜び」では、民生委員活動を通じ「老い・死・生きる意味」を考えるようになり、「孤独死」に遭遇した時、地域の問題を肌で感じたそうで、地域を担う区社協の役割として、地域に精通した区社協から住民の声を聞き、社協職員は情報収集することが必要であり、介護保険下での社協の役割は介護認定で自立と判断された方、一人暮らしや高齢者

世帯に発生する問題に対し、どう取り組むかが求められてくる。

医療の進歩と共に「長寿・長生き」という貴重な対価を得た人達が現代の社会ではマイナス要因と判断される風潮に見舞われ、社会に委ねることへの負担感を持ち、遠慮しながら生きていなくてはならない。この現状を地域、コミュニティ単位で考え、その対策を講じないといけない。なぜなら、今の社会は、核家族化が進み、地域に暮らす高齢者とそこに住む若い世代に関わりが存在しない、若い世代は自分ごととは捉えていないのが現状で、いずれは自分達の問題でもある。若い世代は、豊富な経験者である高齢者を社会資源として活用する方策を見つけ、考えるべきである。それが高齢者にとっての生きがいにも結びつき、社会とのつながりを持ち、コミュニティで暮らす意味を持てる、このことでした。

大阪府豊中市社協勝部さん(とても元気な女性で小地域ネットワークを担当された地域に出てバリバリ活動されている素敵な方でした)の発題「介護保険でどうする?どうなるの?」

豊中市社協では、ヘルパーなどの委託事業はやっておらず、介護保険下の今社協がやるべきこと!求められているものについて、NPO団体との座談会の際、これからの社協は

- ① 経営感覚を持ち営利を目的とする社協
- ② 地域福祉活動と介護保険事業者

二本立ての宙ぶらりん社協

- ③ 地域一本やり社協
- ④ 今までどおり何にもしない社協

の4つに分かれるであろうとの話が あったそうで、勝部さんに曰く、社協のやるべきことは何か?社協商店に何を並べるか?ヘルパー?地域?ボランティア?等々。商店であれば店主が決めるが、会長が決められるのか?豊中市社協のある理事は、

「社協が経営とはなににごとか!」

住民や当事者側に立ち地域の声を聞くことではないのか!

と涙を流し訴えたそうです。言い換えば、豊中市社協の地域福祉活動のすごさが伺えます。

さて、二日目、兵庫県社協の藤井さん「これまで財源の裏付けを基に、全社協の説く事業型社協を推進し、事業と職員が膨れ、揚げ句は介護保険にオロオロし、『やっぱり社協の基本は地域だ』といって、地域福祉が簡単に方向転換できるのか!」には痛いところをつかれた。

また、NPO法人寝屋川市たすけあいの会の富田さん曰く、「社協によるけど、社協という看板を背負い、公にも認められる社協職員が地域活動をどんどん推進できないのが不思議だ!できないのならこれからはNPOがガンガンやっちゃうよ!」

以上、第1分科会の報告でした。

第7回全国社協職員のつどい

住民主体を考える基礎講座2000

なりたいワーカーになろう

きっと忘れられない瞬間になる...

浮羽町社会福祉協議会
國武 竜一

若手職員は諸先輩方の話を「へー」「ほー」と感心して聞いている場合じゃない。経験年数は少ないなりに、そこから感じる必要がある。そして、そこから伝えなければならぬことがある。というところでしょうか。

私は基礎講座(経験年数3年未満者)に参加しました。そこには、全国からの強者(?)のほせ者達が集結し、またどの顔もホントに若いフレッシュな学生のような中での分科会になりました。

発表者には、京都府弥栄町社協のマシンガントークワーカー坪倉さんから、社協に入った時の「ここはいったい何なの?」という社協から、現在では「あの(当事者)のために色々やっていたんだな!」ということが分かって実践しているという、ワーカーとしての成長過程の報告が止めどない話(「ねえ!きいて!きいて!」口調)で行われ、圧倒されてしまいました。私の基本姿勢としては、発表者に対して質問が出来るようにしっかりと話を聞き、必ず一つは質問なり、「私はこう思うのですが」という発言をさせていたから、後々お近づきにならせていただくという方針なのですが、この時ばかりは「何も言いきらん!」「勢いに負けた」という敗北感を味わったのでした。まあ、坪倉さんは坪倉さん流で突っ走っていくことでしょうかと思いましたが。

その後ようやく小グループに分かれて、フリーディスカッションができる環境設定が行われ、私を含め5名(女2男3)の仲間内でのお見合いがはじまりました。定番の自己紹介と一言と一言と、面々が「〇〇社協から来ました。〇〇と言います。〜です。〜で宜しく願います。」拍手パチパチと一通りやるわけですが、やはり第1印象が大事ですので、せっかく福岡県代表?として浮羽町から来ておりますので、そのことを強烈・鮮烈に印象づけなければいけないと、浮羽町妹川(い

もがわ)の自宅を出る前から考えていまして、さっそく花柄の名刺と、一〇年度事業報告書と、一一年度事業計画書と、今年度私が編集して作った「よりの手引き」をサッと差し出して、ダンディを装いながら「私はこういう者ですが」とさりげなく振る舞いました。あとは完全に自己満足に浸ってしまい、他人の自己紹介などは良く覚えていませんが、なんとか名前と所属社協くらいはかるうじて暗記しました。

自己紹介後、社協職員といっても職種が違うということから「私は何をやる人ぞ」という話しを各々発言して、みんなの意見として「現場の対象者の顔がよく見える、ジャージ姿でもしっかり働ける、市町村社協が楽しい、うらやましい」ということを満場一致を持って採決しまして、後半のグループ討議のお題には「無敵の社協ワーカー」を考えようということになりました。

一区切り付けた後で、第2の発表者広島市安佐北区社協の超ベテランワーカーであられる葉真寺さんより、数々の住民組織化運動の事例(伝聞事例でなく本人が情熱をそそいで実践した事例)の報告が行われ、1人のワーカーがこんなにとくさんの事を起こすことが可能なのか!と、始めはこのおぼちゃんは何を発表するのかなと思っていたことから、話しが進むにつれてとてつもなく大きな存在のように思えるようになり、最後は葉真寺さんに葉師如来ばりの後光さえ見えるようになりま

した(冗談抜きですごいと思えるやりのワーカーさんでした)。この葉真寺さんの好きな言葉は「出逢いから学ぶ」ということですが、まさに私も今から訪れる出逢いの中からは、どん欲に学べるものは何でも学ばせていただきましたと思います。

グループ討議は、だらだらと好きな話しをして「はいっ、終了」という訳にはいかないのが欠点で、

やはり「無敵の社協ワーカー」像を考えて、具体的に模造紙に示しなさいという義務を課せられてしまい、制限時間との戦いの中でイラストによる漫画チックな社協ワーカーを作成しました。作品の善し悪しは別として、我々グループでは、アンテナをいっぱい張った、熱い心を持った、体力を持った、動き回るワーカーを書きました。まるで具体的ではないのでこれ以上深く言及しませんが、まあありきたりと言え

ば別々のグループの強者達が「社協家訓」なる5ヶ条を提示して、皆の心をかなり揺さぶりましたので、若人の分科会を代表して全体会報告の方にノミネートされました。

読者の方は心してサラッと読んでもいいですので、真摯に受け止めていた

社協家訓

一、アンテナを広げて

探そう住民ニーズ

一、電話出たあなたか

社協の窓口です

一、昨日より一つ増やそう

市民の笑顔

一、一人でもあなたの

悩みは権利です

一、私たち二枚目

じゃなく三枚目

ということ、当たり前といわれればそれまでの事なんです、社協ワーカーの基本的考えとしては、若輩者達だんだんわかってきたなどご評価いただけるでしょうか。

兎にも角にも、ロクオリティかもしませんがハイパワーなエナジーを感じるにはとても良い機会であったこ

とはまちがいありませんでした。同じような『情熱』や『悩み』などを持った、全国のエージェンツ達との出逢いは大きな財産になりました。皆さんも是非参加してみてください。参加費・宿泊費・宴会費以上に得るものは大きいと思いますよ。

第7回全国社協職員のつどい

**うわさどおりの
楽しい関コミ**

桂川町社会福祉協議会
山本 和恵

一度は参加してみたいと思っ

分科会は、当日無理を言って変更し

てもらい、第1分科会「介護保険時代でも地域福祉の根っこは変わらない」住民のくらしにいきづく福祉のまちづくり探究に参加させて頂きました。印象に残った言葉は、

- ・負けたら勝つとかではなく、困った人の声を大切に
- ・会長さんを通して声を聞くのではなく、協で働く方々と直接話をする

- ・当事者の方にアイデアをもらいながら、共に企画を立てる
- ・同じものを見て課題と感ずることが

- ・できる感性を持つ
- ・関わる人を増やし、お客さんを作らない
- ・情報、人、相談があふれているのをいかに活かせるかは社協職員にかかっている

- ・ケアプランは八五項目の「できない事」のチェックのマイナスイメージからスタートするが、できることを引き伸ばして、その中から生活を創造していくことが大切

その他の分科会は、全体会での報告しか聞けませんでした。「悩みや困った事は多いが、あえて理想を出してそのギャップの中から解決策を考えていこう」等のプラス思考の意見が多く、本当に全て参加したいと思わせる内容でした。

パネルディスカッションについても事前アンケート報告もあって、充実したものでした。

実行委員として「福岡県社協職員の

つどい」に携わらせていただき、毎日の業務をこなしながら準備をしていくことの大変さを教えられました。今回のつどいの参加券や分科会担当者からの資料提供のお願いの力が届くなど、細やかな配慮がなされており、関コミの方の熱意と努力に頭が下がります。

夜に行われた交流会でも、昼間の分科会での議論がまた始まり、二次会、三次会へと果てしなく続きました。経験年数の若い方から局長レベルの方が社協職員外の方等、様々な立場の人が遠慮なく語れる。福岡に欠けている部分のように思えました。

参加している誰もが、社協が好きで、大切に考えている。だから自分の事のように真剣になれ、思いを熱く語れる。そして、そんな共通点があるから、初めて出会ったような気がしないのかもしれないですね。陽気で気さく、どこか南米に似ている、懐かしい気持ちになりました。次はこの記事を読んでくださっているあなたも一緒に参加してみませんか？きっと、関コミの「とりこ」になると思いますよ。



新人紹介 明日花咲



宝珠山村社会福祉協議会
中嶋 沙織

- ・経験年数 一年四カ月
- ・趣味・特技 球技（今年スノボに目覚めました）

平成一一年四月に宝珠山村社会福祉協議会へ事務職員として入りました。福祉に対して知識も経験もない私が住民の皆さんのニーズに応えられるのが不安でいっぱいですが、もうすぐ一年が経とうとしています。私は与えられた仕事をこなすことで精一杯でした。正直、社協とは何なのかわかっていない自分があることは確かです。

でも、もう二年目になることだし、自分なりに社会福祉協議会について理解すること、村の人々に私の顔を覚えていただくこと、そして社協を理解したうえで、今の私にできること、住民のニーズに少しでも応えられるように日々勉強し、努力していきたいと思っています。諸先輩方、ご指導の程どうぞよろしくお願いいたします。



大刀洗町社会福祉協議会
池松 昌亀

・経験年数 一年一カ月
・趣味・特技 酒・パチンコ

昨年七月より大刀洗町社協で事務職員として勤務しています。生まれ育った大刀洗町をどんな地域にしていけるか私の手腕にかかっている、などとうぬぼれ半分、気合十分で頑張っていました。しかし、最初の一カ月はする仕事がない、何をすればよいのかわからない、本当に事務の仕事しかさせてもらえない、などと忙しい毎日でした。そんな私も今では大刀洗町社協の戦力の五〇％(自称。しかも職員が二人なので…)になっています。毎日パソコンと民生委員さん・ボランティアさん・老人クラブの皆さんの相手で大忙しです。住民のわがままをたくさん聞いてやれるような社協マンになれるようにこれから頑張っていきたいです。



立花町社会福祉協議会
大石 愛子

・経験年数 一年四カ月
・趣味・特技 バレーボール・水泳

平成一一年四月から立花町社会福祉協議会に勤務しています。「社協人」になって一年が経とうとしています。果たして自分がどれくらい仕事の内容を理解しているのか疑問に思う今日この頃です。そればかりか、生粋の「そっかしさ」には磨きがかかり、たくさんの方に迷惑をかけています。そんな私が、最近になって「社協人(社会人)」として、必要だと思ふのが、「謙虚さかつ貧欲さ」です。この一年間、毎日が新しいことばかりで、仕事に体当たりしてきたという感じです。その場しのぎで、周囲から学び取ろうとする姿勢、追及しようとする意欲に欠けていたように思います。『謙虚さかつ貧欲さ』を二年目のモットーとし、仕事に励みたいと思います。ですので、どうぞよろしくお願いします。



水巻町社会福祉協議会
池田 淳

・経験年数 一年四カ月
・特技・特技 茶道
・セールスポイント

セールスポイントがない所がセールスポイントだと思っています。カリスマ専門員を目指して社協に入って、早や一年が過ぎました。一年間で、何をやってきたのかと問われると、果たして何かをやったのかと首をかしげないと。いけません。今までは、ある程度、新人というところで逃げていた面も多々、あると思います。しかし、これからは、それは許されません。社協職員として、専門員として、逐一、考えた行動をし、正に「カリスマ専門員」と呼ばれるようになります。と考えています。



穂波町社会福祉協議会
鬼頭 紀行

・経験年数 一年四カ月
・趣味・特技 スポーツ全般なんでも
・セールスポイント

私が社協に入って、早いもので一年が過ぎました。一年前の今頃は、仕事もわからず、土地柄もわからず、不安だらけでした。(今でもわかったとは言いがらしいのですが)特に、山を二つ越えてこの町にやってきた私にとって、言葉の微妙なニュアンスの違いを聞き分けるのには、今でも苦労します。方言のように、言葉が全くわからないなら、まだよかったです。ところが、全体的には通じる中で、言葉尻での微妙なニュアンスの違い、そこから生まれるちょっとした誤解には、本当に気を使います。しかし、もちろん楽しいこともあります。手話の会や役場の野球部に入ってもらっていること、一人暮らしの自

分を心配してくれる先輩、地域の方々のありがたさ。多くの人に囲まれて、頑張っていたいと思えますので、よろしくお願いいたします。



吉井町社会福祉協議会

生野 照美

・経験年数 五年四ヵ月
・趣味・特技 書道・楽器演奏

こんにちは。吉井町社協の生野です。社協を全く知らずに入ってしまった私ですが、最近、社協はやる気があればいろんな事ができる可能性のある場だなど思えるようになってきました。

社協に入り、多くの方々との出会いがあり、その中でいろんな事を教えていただき、私も少しは成長できたのでは(?)と思っています。(なんと身長は一〇近くも伸びました!)

私のとりえは、いつも明るく元気なところだと思っていますので、これを生かして、また、一つ一つの出会いを大切にして頑張りますので、よろしくお願ひします。



桂川町社会福祉協議会

藤川 早織

・経験年数 一年四ヵ月
・趣味・特技 ドライブ・温泉旅行
パズル作り・弓道

地域担当職員として勤務し早一年。あつという間に過ぎ去った。というのが実感です。

社協はいろんな人と出会い、係わっていく対人との仕事。本当にいろんな人がいるなあと感じています。また、「社協とは何をやる所か」の問いに対し、自分なりの思いを現在模索しているところ。そのためには、まず桂川町住民のことを知るのが先決だと教わり、多くの人と話しをすることで相手を知り、同時に私の顔・社協のことも知ってもらえるよう心掛けていますが、長年生まれ育った町なのに知らないことの多さに驚いています。

地域に足を運ぶことがまだまだ少ないのが反省点ですが、「地域に入らないで地域福祉は語れない」、「各地域の人

が抱えている課題の声を以下に引き出しどうつなげるか」と教わったことを今後も忘れず、大切にしていこうと思っています。まだスタートしたばかり。これからのいろんなことを勉強し、吸収したいと思っていますので、皆さんよろしくお願ひします。



桂川町社会福祉協議会

伊藤美奈子

・経験年数 一年三ヵ月
・趣味・特技 本を読んで料理を作る

平成一一年五月より、桂川町社会福祉協議会の専任職員となりました。最近、結婚して新しい名前になり、社協関係者やボランティアの皆様には大変ご迷惑おかけしています。

今年度から複式簿記への移行ということで、頭の中は、伝票がぐるぐる回って処理に追われています。一生懸命しているつもりでも、別の方法が効果的であることも稀にあります。今後の役に立てばと思いつつ、同じ失敗をしないように頑張ります。

編集後記

浮羽町社協 國武 竜一

世の中がIT革命と言っているにも関わらず、この『まなこ』は半年も前に行われた『社協職員をつどい』の記事、さらにはそれより前に行われた『全国社協職員をつどい』の記事を載せていることに、「情報が遅い!」とお怒りの方もいらっしゃると思います。編集委員の私ですらそう思いますので、『まなこ』を心待ち?にしておられる愛読者の皆さんからは、「編集委員は何しよっとか!」と怒鳴り声が聞こえてきそうです。たしかに、各市区町村社協で発行している「社協だより」の記事が、夏場に冬のクリスマススふれあい交流活動が載っていたりすると、おかしいですよ。『まなこ』発行についても同じこと、私たち編集委員会もその辺のところが深く反省しなければならぬと思います。

現在、福祉の業界においても、『情報』をいかにして早く入手できるかが、事業発展に欠かせない要素になってきているようです。

新しい正確な情報をいち早く入手して、それぞれの社協活動に活かせるようにするには、情報を発信する側に依存するばかりでなく、情報を受けようとする側もアンテナを積極的に張り巡らせて、色んな所から『耳より情報』を取ってこれる能力を養わなければ、時代の流れに取り残されますぞ。